

<総括>

出題数	現代文 2題・古文 1題	試験時間	120分
-----	--------------	------	------

- ・教養に偏した「伝統主義」を排し、自由な態度で新しい芸術の創造を説く、芸術家の随筆からの出題。
- ・本文の分量は昨年度よりも1頁ほど増加している。すべて記述説明であり、設問数も五問と変化はみられない。ただし、解答欄の行数の合計は昨年度(17行)に比べ19行と2行増加した。
- ・本文の分量の増加、記述分量の増加はみられるが、総合的にみて、全体の難易度は、ほぼ例年並。
- ・昨年度同様、本文は文理共通だが、理系では文系で出題された問四がなく、全四問の出題となっている。

<本文分析>

大問番号	□
出典 (作者)	岡本太郎 『日本の伝統』(昭和三十一年)
頻出度合 ・的中等	なし
分量 前年比較	分量(減少・やや減少・変化なし・ <b>やや増加</b> ・増加)
難易 前年比較	難易(易化・やや易化・ <b>変化なし</b> ・やや難化・難化)

<大問分析>

大問	ジャンル	設問	設問形式	難易度	コメント(設問内容・答案作成上のポイントなど)
□	随筆	問一	記述式	標準	傍線部の内容を説明する問題。(解答欄3行) 「どちらが……分からなくなってきました」という表現に適合する説明となるよう、工夫が求められる。
		問二	記述式	標準	傍線部の内容を説明する問題。(解答欄4行) 「自分が法隆寺に」という修辭的な表現が指す内容を直後の文脈から正確に組み立てて説明する。
		問三	記述式	標準	傍線部の理由を説明する問題。(解答欄3行) 筆者が警戒していたことを踏まえて、傍線部の「アブナイ」という表現が示す内容を具体的に説明する。
		問四	記述式	標準	傍線部の内容を説明する問題。(解答欄4行) 「芸術の力」という表現に合致するように、本来的でない芸術と対比しつつ、その働きを説明したい。
		問五	記述式	標準	傍線部に関わらせた趣旨の説明の問題。(解答欄5行) 「美に絶望し退屈している者」の含意を文脈から丁寧に説明しつつ、「ほんとうの芸術家」という語に込められた本文全体の趣旨を踏まえた説明を組み立てるよう、工夫をこらす必要がある。

※難易度は5段階「難・やや難・標準・やや易・易」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

- ・評論であれ随筆であれ、文章の主題や筆者の主張を全体からの確に把握するとともに、個々の文脈を丁寧にたどって正確に押さえる読解力が不可欠である。
- ・設問の意図を踏まえ、理解した内容を簡潔かつ的確に表現してみる訓練が欠かせない。
- ・今年度も、漢字問題は出題されなかったが、読解力養成の前提として、その知識の蓄積を怠らないこと。

<総括>

出題数	現代文 2題・古文 1題	試験時間 120分
-----	--------------	-----------

昨年・一昨年と同じく、随筆からの出題となった。自らの読書法を〈邪読〉と呼びながら、小説家である筆者が自らの読書という営みの本質に触れようとする文章。昨年出題された石川淳の旧仮名遣いの随筆に比べ、かなり読みやすくなった。設問は、何を書いたらいいかわからないという難問こそなかったが、問五など本文全体に関するものもあり、論述問題に慣れていなければ苦労したと思われる。

<本文分析>

大問番号	□
出典 (作者)	高橋 和巳 「〈邪読〉について」
頻出度合 ・的中等	なし
分量 前年比較	分量 (減少・やや減少・変化なし・ <b>やや増加</b> ・増加)
難易 前年比較	難易 (易化・ <b>やや易化</b> ・変化なし・やや難化・難化)

<大問分析>

大問	ジャンル	設問	設問形式	難易度	コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)
□	随筆	問一	記述式	やや易	傍線部を説明する問題。(解答欄2行)
		問二	記述式	標準	傍線部の理由を説明する問題。(解答欄3行)
		問三	記述式	標準	傍線部の理由を説明する問題。(解答欄4行)
		問四	記述式	標準	傍線部の理由を説明する問題。(解答欄4行)
		問五	記述式	やや難	本文全体を踏まえて傍線部の内容を説明する問題。(解答欄4行)

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

- ・文系□では、昨年に引き続き本年も随筆が出題されたが、評論や小説を含め、できるだけ多様な文章に接しておくことが肝要である。
- ・問題に取り組む際には、文章の主題と絡ませながら筆者の考えや思いを本文全体から大きく把握するとともに、個々の文脈の趣旨を的確に読み取っていくことが肝要である。その上で、理解した事柄を〈簡潔かつ分かりやすく表現する〉といった訓練は欠かせない。

<総括>

出題数	現代文 2題・古文 1題	試験時間	120分
<ul style="list-style-type: none"> <li>・近世の歌論、田安宗武『国歌八論余言』からの出題であった。</li> <li>・近世文からの出題も歌論からの出題も2019年度入試『三のしるべ』以来である。</li> <li>・漢文・漢詩は、4年連続なかった。</li> <li>・昨年と同様本文に和歌があり、設問にも和歌の内容についての設問が出題された。</li> <li>・解答数は昨年と同じで五つであった。</li> </ul>			

<本文分析>

大問番号	三
出典 (作者)	『国歌八論余言』 (田安宗武)
頻出度合 ・的中等	稀 ・ 2021年秋実施 第2回京大入試オープンと的中
分量 前年比較	分量 (減少・やや減少・変化なし・やや増加・増加) 約820字 (前年は約880字)
難易 前年比較	難易 (易化・やや易化・変化なし・やや難化・難化)

<大問分析>

大問	ジャンル	設問	設問形式	難易度	コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)
三	歌論	問一	記述式	標準	説明問題。「筆者が歌合を『いと浅ましきわざ』だと言う」理由を説明する。第一段落をまとめるのだが、和歌の本質がどのようなものか記す所がポイント。 (解答欄3行) 「指示語が指す内容を明らかにしつつ」という条件付きの現代語訳問題。 (2) 「それ」の指示内容、「己にたよるにしもあらぬ人」「もて出でて言ふべきこと」を内容がわかるように訳す所がポイント。(解答欄3行) (3) 「われ」「人」「き」の内容がわかるように訳す所、「こそ〜らめ」の逆接用法の訳などがポイント。 (解答欄2行) 「筆者が挙げる例に即して」という条件付きの説明問題。「意余りて詞足らざるがごとくなりぬ」の「意余り」「詞足らざる」ことを引用の『万葉集』の「ふりける」と「ふりつつ」の違いで説明する。(解答欄4行) 「『その人』が指すものを明らかにしつつ」という条件付きの現代語訳問題。「思はば」「ありぬべき」「さへ」「あぢきなき」などに注意して、傍線部自体を文脈にあわせて現代語訳するところがポイント。(解答欄4行)
		問二	記述式	やや難	
		問三	記述式	標準	
		問四	記述式	標準	

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

- ・今年のような歌論からの出題は、京大文系古文の一つの流れなので、中世・近世の歌論といった文章に慣れる必要がある。
- ・昨年までの二年間は有名出典、平安時代の作品だったので、以前も出題されている『源氏物語』を代表とする平安時代の典型的な文章にも慣れておく必要がある。
- ・今年のように非有名出典からの出題もあるので、いろいろな時代・ジャンルの文章に慣れておこう。
- ・今年も和歌についての設問があった。修辞、現代語訳、内容説明など和歌に関する対策は必ずしておきたい。
- ・今年は出題されなかったが、漢文・漢詩の訳や意味の設問が過去に出題されているので、漢文を読む練習は必ずしておく必要があるだろう。
- ・現代語訳は、人物の補い、指示内容の具体化などわかりやすい現代語訳が要求されている。本文全体の現代語訳ができるかどうか京大文系古文の根本である。文脈を踏まえた現代語訳の練習がいちばんに望まれる。
- ・心情説明もよく出題されているので、慣れておく必要がある。
- ・古文常識についても学習しておきたい。